勇者なんていらない

宇良木　莉子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勇者なんていらない

【Ｎコード】
Ｎ５０２５Ｘ

【作者名】
宇良木　莉子

【あらすじ】
勇者を呼ばなきゃいけない感じに追い込まれてどーせ召喚できないだろうとヤケクソでやったら召喚されちゃったよ勇者。なにしに来たんだよ。いや呼んだのは自分ですけども。もういいよほんと帰れよ。そんな魔法使いの女の子のお話。

プロローグ（前書き）

シリアス苦手ｏｒネタバレに近い伏線なんて嫌！って人はプロローグはすっ飛ばして第一話からお読みください。

プロローグ

昨日と同じ世界が今日もまた繰り返される。
けれどこの世界にもう君はいない。
世界は一人を喪っただけでこんなにもくすんでしまうものだろうか。
君がいない以外は何一つ変わらないはずなのに、何故か全く違うものなような気がする。
愛しているということが許されない人だった。
言ったら君は困っただろう。一人できっと苦しんだだろう。だから絶対に言えなかった。
それでも誰より愛していた。
想いは秘めて、一度だって言わないままだった。
言いたかった。どうしても伝えたかった。けれど伝えてはいけない相手だった。
このままだと隠し通せなくなりそうだった。
君が俺の思いを知る前に逝ってくれてよかったのかもしれない。
俺が君に触れないでいられるうちに。
君は最期まで優しいままで、綺麗なままで、俺が大好きな君のままだった。
それでも今でもどうしても、よかっただなんて思えないけれど。

パラレルワールドというものが本当にあるのなら
何処か他の世界に行けば、君にまた出会えるだろうか。
俺のことなんて何一つ覚えてくれていなくて構わないから
もう一度だけ君に逢いたい。

プロローグ（後書き）

いきなりシリアスな感じで始まりましたが、（多分）きっと（おそらく）全体的にシリアスな感じは薄い（はずの）内容にしていこうと思っています。
全然書き溜めていないので更新は不定期になりますが、楽しんでいただけたら幸いです。

誘拐

ツバキ・タキツスベルスは本日少なくとも１０数回目のため息をついた。
「お願いします…大賢者と大魔法使いの子供であるあなた様ならきっと…！」
もう何度繰り返されたかしれないその言葉をうんざりした気持ちで聞く。
「この国には今勇者が必要なのです。あなた様もそれはわかっておられる」
一つだけ頷く。それは充分わかっていた。
突如現れた魔物は徐々にその生息地を広げ、今では国土の４分の３が人の住めない土地とされている。
「おかげで街に人がえらい増えて狭苦しいったらありゃしない」
「…問題はそこではないのですが」
まぁいいでしょう、と老人は肩を落として言った。
「とにかくっ。あなたには大魔法使いの素質があるはず！」
「んなもんねーよ」
「いいえあります！」
力説するおじいちゃん。何故そこまで信じ込めるのか。
「それでもって異世界から勇者を呼び出してほしいのです！」
「いや、もー無理。マジで無理。というわけでおやすみ」
さわやかに答えてベッドの中にもぐりこむ。
「寝かせはせぬ！寝かせはせぬぞ！」
「あああああベッドの中まで入ってくるなぁああああ！！」
「あなた様がはいと言ってくださるまではあああああ！！！」
「ああっもう！よく聞けっ」
布団を跳ね飛ばす。まだ温かい布団と離れるのは涙がでるくらい辛かったがじじいと添い寝よりはマシだ。

「俺は落ちこぼれだ！」
「そんなわけがありませぬ！」
「両親とは似なかったんだよっ親が美形で子供がぶっさいくなんざよくある話だろうが！それと似たよーなもんなんだよ！」
「あなたさまは父上母上によく似てらっしゃる！」
「言いたいとこはそこじゃねぇえええ！」
埒が明かないにもほどがある。
「いや…でも母上さまはもうちょっとこう、メリハリのある身体だったというか…まぁくびれは問題ないとしてもこう…なんていうかの…ぼいーんの部分が…いやまぁ並レベルっちゃあ並だが…母上さまはもっとこう、ほんとに」
「うるさい、死ね」
ついでにとっても失礼である。まかり間違っても年頃の女性に言うべき言葉ではない。
はぁとため息を吐く。
王宮からの遣いはこれで13人目だ。
どれもそこそこ粘りはしたが、これほどまでにうざったいのは初めてだ。
それにしたってしつこい。それはもうゴキブリのようにしつこい。ゴキブリがしつこいかどうかは知らないがしつこい。
「老い先短い年寄に死ねなど、なんと恐ろしい方よ…」
「おめーみたいな老害はなんの役にも立たないから安心して逝け」
「はあああああ心が傷つくうううう。頑張れわし！王のために！」
「その王様はなんて言ってんだよ。そんなにも俺にこだわってんのか」
「あの方は勇者さまをただひたすら心待ちにされております。『早く勇者たん現れないかなぁハァハァ』と毎日切なそうに特注のビッグサイズの枕を抱きしめておいでです」
「うん、今の言葉で絶対勇者を呼ばねぇって俺の気持ちが確定した」
まかりまちがって呼んでしまった暁には、しかもそれが女の子だっ

た暁には、がっつり手籠めにされてしまいそうだ。ていうかする気満々だろ王様。
「なんと…呼ばない、と？」
「おう」
おじいちゃんの目がきらっと光った。
「呼べない、ではなく呼ばないんですな？」
なんだか嫌な予感。
「ということは呼べるんですな呼べるんですなー！」
「あああああ近づくなだからあああああ！」
「さぁさぁ王宮に参りましょう！王様が待っておいでです！」
「いや、だからあああ！！！」
老爺が杖を振ると不意に背後からばっと大きな手が伸びてきた。逃れようと体をひねるが一瞬遅く、鼻と口を押えられる。ごつごつとした手で触れられるだけで寒気がするが直接ではなく布一枚隔てているのが不幸中の幸いか。反射的に抵抗しようとしたがなんだか力が入らない。
「なに…ねむ…っ」
「ふっ。これが年の功による作戦というやつですじゃ。」
いやこれただの誘拐だから。
そう突っ込む間もなく、ツバキは深い眠りの中へと落ちていった。

誘拐（後書き）

ヒロイン、いきなり誘拐されます。
頑張れヒロイン。

召喚

目が覚めるとそれは美しい泉の畔に横たわっていた。
「…わぁ素敵☆なんて言うと思ってんのかじじい」
「なんと最近の若者は心の狭いことよ」
よよよと嘆かれても誘拐まがいのことをされたばかりで心が動くわけもない。
「嘘泣きを今すぐやめろ。そしてここがどこか説明しろ」
「うぅっ服もそれっぽいのに着替えさせたのにぃ」
言われてからようやく気付く。服が簡素な男物の平民のものから魔導師のものへ変わっていた。
白い色は最上級の証だ。パッと見はシンプルな作りだが白い縫い取りが随所に施されている。肌に触れる感触も好ましい。一般的な花嫁衣裳よりよほど豪奢だ。
「…じじぃ、まさかてめーが着せたんじゃねーだろうな…」
「さすがに侍女に任せたぞい。安心してよろしい」
「なんで上目線なんだてめーは」
「感謝してくれるかなぁって思って」
「するかボケ。今すぐ抹殺したいくらいだわ」
「おぉ、最近の若者は危ないの」
ふぉっふぉと笑う好々爺然とした表情がムカついてしょうがない。
「まぁ、堪忍しておくれ。場所も服も決められておるのだ。勇者を呼ぶための、な」
すぅっと目が細められる。
「…じじぃ。てめぇ何者だ」
勇者が訪れる場所は聖なる泉(セノーテ)と呼ばれ、城の奥深く、よほどの立場の者でなければ足を踏み入れることすら許されないと聞く。
自分がいるのはまぁいい。自分は勇者を呼ばれるために連れてこられたのだから。だがこの老爺がいることを許されているのは何故だ。

「まぁ予想はついてるけどな。年齢、此処に立ち入ることを許される身分、その紫の瞳。わかんねーほうがバカだ」
この国において瞳の色は生まれを表す。平民なら茶。貴族なら青。血が濃ければ濃いほど色は深みを増す。
そして紫が示すものは。
「先々代国王陛下の弟御グルーイア卿、自ら動くたぁごくろーなことで」
老爺――ラナンキュラス・グルーイア卿は柔らかく微笑んだ。
「近頃の若者は怠惰な者が多いようでの。お使いもまともにできん。やむなくわしが老体に鞭を打って重い腰を上げたというわけよ。あの二人の子というのにも興味があったしのぅ」
懐かしむような瞳が居心地の悪さを加速させる。
「あぁ、ほんに似ておる。銀の髪はアルメリア譲りじゃな。赤の瞳はヤブランと同じじゃ。懐かしいの。ほんに懐かしいのぉ」
ぎゅっと唇を噛み締める。
髪の色も瞳の色もわずらわしい以外感じたことはない。どちらも異端なものだから。
「おぬしならきっとできる。あの二人の子なのじゃからな」
できない。
自分には何もできない。
最大級の魔力を持つ者の証である白銀の髪も。最上級の魔法を使える証の赤い瞳も。なんの役にも立たない。
眠っている魔力があるはずだと、使える魔法があるはずだと、信じ続けるにももう疲れた。
「そこまで言うなら、やってやるよ」
信じぬのならその目で確かめてみるがいい。
「勇者とやらを呼び出してやる。…やり方を教えろ」
ラナンキュラスはにやりと笑った。なんて胸糞悪い笑顔だ。よほど性格が悪い奴じゃないとこんな顔はできまい。
「なーに、簡単じゃよ。おぬしはただ魔方陣を描けばよい」

「どんな陣だ。こう、図案とかないのか図案とか」
「そんなんないわい」
「じゃあどうやって書けってんだよ」
「わしは知らん、というとるだけじゃ。おぬしは知っとる」
「知るわけねーだろんなもん」
「知っとる」
「知らんわ」
「知っておるはずじゃよ。アルメリアに教えてもらっとるはずじゃ」
「母さんに教わったのなんて…」
言いかけて口をつぐむ。まさか。
「魔法（マジック・グース）の絵描き歌のことか…」
「そうそうそれそれ。多分それ。一応国家機密」
さらっと言ってのけられると頭が痛くなる。
「…っんな大事なもんを子供の絵描き歌なんざにしてんじゃねーよ！！」
「いいんじゃよ。誰が書いても発動するというわけではないからの。場所も重要じゃし」
しかし考えおったの、とラナンキュラスは関心したように言う。
「どうやって教えたのか気になっておったんじゃが。まさか絵描き歌とはの。それならどんな物覚えの悪いバカでも覚えられるわい」
「おい、誰が物覚えの悪いバカだ」
「言葉のアヤというやつじゃ。気にせんでよろしい」
いちいちムカつくじじいである。
「とにかく、それを描いてみてくれんかのう」
ちらっちらっ。
…イラッ。
年寄の上目使いほどいらっとするものはない。
「描けったって、何処に書くんだよ」
「泉の中に書くんじゃ。ほれ、杖は貸してやる」
「濡れるから嫌だ」

「大丈夫じゃ。その服には決して濡れない魔法がかけてあるから」
小さく舌打ちをする。
どうも、逃がしてくれそうにはない。
ツバキは腹を括った。多少面倒だがこれで毎日のように押しかけてくる使者たちとも縁が切れるのだからやる価値はあるだろう。どうせこの儀式は間違いなく失敗するのだ。
自分には才能がないのだから。
ため息をついて泉の中に足を踏み入れる。
「あなたに星をあげましょう…丸い太陽と三日月を…」
小さな声で歌いながら陣を描く。
歌うのも書くのも久しぶりだ。
亡き母の優しい声を思い出し、少しだけ切なくなった。
「お皿の上に乗せまして…雨粒ソースを3滴と…」
それにしても不思議な泉だ。水は澄み、不思議に温かい。しかも段々と温度が上昇してくるようだ。
「花の飾りを2つ添え…リボンでくるめば出来上がり！」
トン、と杖を陣の中心に突き刺す。
さざ波が泉の端に達したころ、不意に風が起こった。
（…え…え？えええええっ！？）
反射的に杖を手放して数歩後ずさる。
杖はツバキの手を離れた後もその場に真っ直ぐに立っていた。
湖面が光る。眩しくて目を瞑る。目を瞑っても腕を翳してもなお瞼に差し込んでくる強烈な光。
（まさか、本当に…！）
光はほんの数秒だった。
再び目を開けるとそこには奇妙な格好をした男が立っていた。
「此処、は…」
男は茫然と辺りを見回し、やがてツバキを視界に止めた。
「ツバキ…？」
ぽつりと漏らす。

驚いたのはツバキのほうだった。
「なんで俺の名前…」
「なんでって…え？俺の名前？え？」
遅ればせながら男は混乱状態に陥ったらしい。
「ちょっと待って。そもそも此処どこ？なんで俺此処にいるの？」
混乱状態なのはツバキも同じだ。
なんなんだこの男は。何処から降ってきた。
「異世界に飛ばされたものとしては至極まっとうな反応じゃな！」
ラナンキュラスが何故か満足そうにうんうんと頷いているのが視界に入る。
ということはやはりこいつが勇者なのか。
「いやーさっすが！さすがタキツスベルス家の子じゃ！わしの目に狂いはなかったのー」
嬉しげな声にやっと我に返る。
目の前にいるのは多分勇者だ。あんまり勇者！って感じのムキムキマッチョではない。おそらく認めたくはないが可能性としては勇者であることが高いと言えなくもない。
何故勇者（仮）がこんなとこにいるのだ。
考えるまでも無く哀しいくらい答えは簡単だった。
自分が呼び出したからだ。
では何故このようなことになってしまったのか。
自分には才能など無い。そう知らしめるための手段だったはずだ。
実際勇者が召喚されてしまっては逆効果ではないか。
ムカムカと怒りが湧いてきた。
「おい、てめぇ。この勇者」
「へ」
ぼんやりした返事が返ってくる。
間抜けな顔面を思い切り殴り倒した。
「のこのこと…っどの面下げて召喚されやがったんだてめぇはぁあああ！！！」

それがものすごーく理不尽なことは自分でもよくわかっていたけれど。

召喚（後書き）

口の悪いヒロインですが、手が出るのも早いようです。
そんな感じで勇者召喚。
頑張れヒーロー。

説教

「なんとまぁ…何処の世界に勇者をいきなり殴り倒す召喚士がおるというのか…」
ラナンキュラスが呆れたような、何処か非難めいた口調でため息を零した。
無理もない。待ち望んでいた勇者は呼び出したはずの人間に殴り倒され昏倒し、数刻の時が経つというのにいまだ目覚めないのだから。
執務室のわりにやけに豪奢なソファに座り込んだままツバキは目を逸らした。
「俺ごときに殴られた程度で昏倒するような奴、勇者じゃない」
多少後ろめたい思いを抱えつつぼそっと呟く。
「いやでも、どう見ても異世界の服だったじゃん」
「もしかしたら最近の流行なのかもしれない」
「目も髪も黒かったじゃん。そんな奴おらんて」
「染めてるのかも…」
「なんのために？」
「オシャレで…」
「ほう。おぬし、それが通用すると思っとんのかい」
ツバキだって無理があることくらいわかっている。
「あいつの何処が勇者なんだよ。ぼへーっとしてたぞぼへーっと！」
「四六時中張りつめておったら疲れるじゃろうが！」
「あと絶対あいつ筋肉ねーぞ！父さんのほうがまだマシなくらいだ！」
「ヤブランは一見細いが実は筋肉馬鹿の細マッチョだったからのう…」
「近所の傭兵の兄ちゃんだってもっとムキムキだ！」
「傭兵と勇者を一緒にするでない」
「ああくそっああいえばこういう頑固なじじいだな！」

「そりゃーお前じゃばかたれ」
勇者召喚という目的を果たした今、ラナンキュラスも言いたい放題である。
ムカつく。やっぱり呼び出さなきゃよかった。
しかし、と気を取り直す。考え方によってはこれでよかったのではないだろうか。
もはや勇者を呼び出す必要はない。ラナンキュラスが自分に構う理由ももうないのだ。
「まぁいいや。とにかくお役御免ってことだな。俺は帰るぜ」
「ほう。どこへじゃ」
「うちだよ。決まってんだろ」
「だからそのうちってのはどこじゃ」
「は？もうボケたのかじいさん。何言って…」
言いかけて止める。
グルーイア卿の巷での風評をまとめると以下のようになる。
曰く、温厚そうににこにこ笑っている。
曰く、でも目は常に笑っていない。
曰く、目的を果たすために手段は選ばない。
曰く、常に全ての手駒を押えている。
曰く、捕えた獲物に逃げ場など与えない。食い殺すか飼殺すかの二択。
総評、煮ても焼いても食えないタヌキ爺。
「…じじぃ。てめぇ俺の家に何かしやがったのか？」
「お主の家なんぞ知らんなぁ。ああでもそういえば先ほど大きな火事があったらしいぞ？都の中心からはかなーり離れておるから被害はぽつんと立っておった人嫌いな根暗が住みそうな一軒家だけだったらしいが。いやぁ怖いのう。放火かのう。まぁ家主は運よくでかけておったみたいじゃが。よかったよかった。若い命を無駄にせんですんで本当によかった」
こんなにも人を殺したいと思ったのは初めてかもしれない。

今のはお前の家はもうない、ということだけでなく言外に「何処にも逃げられはしないぞ」というのを匂わせているのだ。「若い命を無駄にしなくてよかった」というのは要するに何かおかしな動きでも見せたら殺すぞ、ということなのだろう。
巷の噂は意外と馬鹿に出来ないものだ。
「俺は駒か。それとも獲物か」
「どちらも、じゃな。勇者を元の世界に返せるのは召喚主であるおぬしだけだからの」
そんなこと初めて知った。知っていれば呼び出しなどしなかったものを。
「おぬしはな、勇者を意のままに動かすための駒よ。だがただの駒ではない。勇者を呼び出すほどの莫大な魔法力はみすみす逃すには惜しい」
「偶々だっつーのに」
「魔法に偶々もへったくれもあるかい。どんなに努力しても魔力は増えぬ。せいぜいが使える魔法が増えると言うだけのものじゃ。種類は増えても質は決して高まらぬ。手の届かぬ魔法は一生手が届かないのじゃよ」
「でも俺は魔法なんて使ったこともなかったんだ！」
悲鳴のような声が漏れた。
「どんな簡単な魔法だって何一つできなかった。この目も髪も何の証でもない、単なる色だ。だから勇者なんて呼び出せるわけない。そんなわけないんだ！」
「だが実際呼び出した」
そう、それがわからない。
そんなことできるわけがないのだ。自分はただの無力な人間なのだから。
ふむ、とラナンキュラスは考え込んだ。
「まぁあれは普通の魔法とは違うからの」
「えっ」

「ほれ、普通の魔法は力を注がなければ発動せんじゃろう。だがあれは陣を描いた者の魔力の多さが重要なんじゃよ。相応の魔力があると世界に判断されれば発動するんじゃ」
世界に判断の意味がいまいちよくわからない。
「見知らぬ人にわが子を預けるのは恐ろしいじゃろ？せめてわが子を守ってくれるくらいの才能を持った奴にしか預けられんじゃろ？そういうわけじゃ」
わかったようなわからんような。
「世界が自分の住人を手放すというのはよっぽどのことなんじゃよ。どんな出来が悪い子でも世界は等しく愛す。たとえそれが自分の身を滅ぼすことになっても愛す。それが親というものじゃ。世界は誰よりも愛情深い親なんじゃよ」
「それほどまで愛した者をなんで手放すんだよ」
「それはほら、わしらの世界もわしらを愛しておるからの。わしらの願いをかなえようと必死こいて他の世界に頼み込むわけじゃ。うちにはこんな優秀な子がいるので大丈夫です。どうかあなたのお子さんを一人任せてくださいとな。そのために魔力の量が重要になってくるんじゃ」
なんかこう、えらく適当な気がしてきた気がしてきたツバキである。というか世界の愛情の基準がイマイチよくわからない。
あれか、要するに、自分は『お宅の息子さんをください！』って頭下げに行ったようなもんなのか。
「注ぎ込む必要はない。示すだけでよい。だから発動できたんじゃないかの」
「要するにどういうことなんだよ」
「要するにおぬしは魔法を使えんのではなく使い方を知らん。不器用すぎるということじゃ。力の使い方がまったくわかっとらん」
ずばっと言われては返す言葉も無い。
「どんなにパンチ力があってもパンチの仕方をしらんのではどうしようもないからの」

しかしこれは難しいの、とラナンキュラスは白い髭に手をやった。
「誰もが息をするように初めからできていることじゃからの…意識せんもんを教えるというのはほんに難しい」
「そうだな。諦めろ」
「馬鹿を言うでない。極めれば世界チャンピオンになれるかもしれん逸材を見逃す人間がおるか」
「いてもいいだろ一人くらい」
「わしゃその一人になるのはごめんじゃ」
はぁとため息を吐く。やはりどうあってもあきらめてくれそうにない。
「よくため息つくのう。しわが固定されるぞい」
「誰のせいだ誰の」
才能。
そんなものが本当にあるのだろうか。
思いをいくら巡らせてもそんなことがあるようには少しも思えなかった。
コンコンとノックの音がした。
「「失礼いたします」」と気品のある声がしてドアが開けられる。
綺麗な双子のメイドはそれはそれは優美な礼をしてから声を揃えて
「「勇者様のお目覚めでございます」」と述べた。
「おぉ、やっとか。ほれ、ぬしも行くぞい」
「なんで俺も…」
「おぬしには責任感という言葉がないんか。しっかり殴ったお詫びをせんかい」
ぐう、と押し黙り、もう一度ため息をついてツバキはラナンキュラスの後に続いた。

変態

「とりあえずはじめまして、というべきかの。それともようこそ、か」
人のよさそうな顔をしてラナンキュラスはベッドの上の勇者（仮）に微笑んだ。だまされるな。その笑顔は偽物だ。
「あ…どっちでも大丈夫ですー」
その返答はどうかと思う。
どうやら勇者（仮）はなかなかにボケた人間のようだ。
「まずは自己紹介からしておこうか。わしはラナンキュラス・グルーイアという。ラナンと呼んでくれれば構わん」
「はぁ、ラナン、さんで」
「さんはいらんよ」
「いや年上の方にそういうわけには」
ラナンキュラス―もうめんどいから自分もラナンでいこうとツバキは思ったのだが―はくるりと振り向いてツバキだけに底意地の悪そうな笑みを見せた。
「ほほう、勇者殿は若者だというのにしっかり礼儀が身についておられるな。おぬしとは大違いじゃ」
「そりゃお前の本性をまだ」
知らねーからだ、と続けようとしたところで首筋に冷たいものを感じる。
「ラナンキュラス様良い方」
「貶めることは許されない」
そっくりな2つの声が耳元でささやく。
ばっと振り返ると少し離れたところに双子のメイドがにこにこと立っていた。
（…声だけ俺のところに飛ばしやがったな）
しかも見えないナイフを首元に突きつけるという同時技もやってのの

けている。
なるほど、ただの美人双子メイドではないということか。
「なにかしたら」
「機嫌を損ねるようなことしたら」
「「殺すよ」」
甘い、鈴の鳴るような声に心からぞっとする。
こいつら本気だ。
「ん？なんかいったかの？」
ああ諸悪の根源のこいつをぶち殺したい。
「あの、その方は…」
勇者が戸惑うように声をかけてきた。
「ああ、こいつはあなた様を呼び出した魔導師ですじゃ。ほれ、ご挨拶せんかい」
小突かれて一、二歩前に出る。
勇者をまともに見るのは初めてだ。先ほどはよく見もせずに殴り倒してしまった。物珍しさに思わずまじまじと見つめる。
顔はまぁ整っているほうだろう。右頬に貼られた大きなガーゼが痛々しい。心の中で「ごめん」と小さく詫びる。
目を惹かれたのはやはりその瞳と髪の色だった。
「本当に、黒なんだな」
ぽつりともらした瞬間、げんこつが降ってきた。声も出せずその場にうずくまる。
「…っつー！！！！！」
その前にまず謝らんかーい！！！！！」
自分がやったことを謝りもしないのは人として最低じゃぞ、とラナンが偉そうに言う。自分はどうなんだと思ったが双子が怖いので追及をやめることにした。
「あー…なんだ。その。悪かった」
「謝っとるうちに入るかい馬鹿モン」
ああ双子メイドさえいなければこのジジイ思う存分ぶちのめすのに

い。
そんなツバキの心の声になど気づくわけもなく勇者はほわーんと微笑んだ。
「いいえ。気にしてませんよ。えっと…ツバキさん、でしたっけ。俺はレン。佐倉レンです。」
ツバキは少なからず驚いた。
頬はまだ痛むだろう。ひょっとすると歯が折れたか欠けたかしているかもしれない。初対面の相手にそこまで思い切りよく殴られて（しかも自分は全く悪くないという）笑える人間がいるというのか。
それはもう人がいいを通り越している気がする。
これが勇者なのか。
「ああなんと寛大なお方なんじゃあああああ」
むせび泣く（と言っても多分嘘泣き）ラナンに向かってレンは優しく微笑みかけた。
「そんなことはありませんよ。美人に殴られるだなんてむしろご褒美です」
「……」
いいやつなのだろう、きっと。
うん。勇者だし。多分。一応。
でもあんまり近寄りたくはない気がする。
「ご褒美、ですか…」
ラナンが少し戸惑っている。いい気味だ。
「そうですね。これで頬を赤らめてちょっと泣きそうな顔をしていたりなんかしたらさらに高得点といったところでしょうか」
それにしてもなんだろうこの勇者の気持ち悪さは。
「ふぉっふぉっふぉっ。いやはや、勇者殿は王と気が合いそうじゃ」
早くも立ち直ったらしい、ラナンが豪快な笑い声をあげる。
ああそういえばうちの王様「勇者たん早く現れないかなはぁはぁ」とか言ってたんだっけか。確かに気が合うかもしれない。感じる悪寒が同一のものだ。しかし男の勇者だと知ったらどういう反応を見

せるものか。楽しみなような怖いような複雑な気分だ。「待ち焦がれていた勇者たん…ああもう男でもいいっ！」なんて結論にならないことを祈る。
それにしても王様と勇者が変態だとは、この国は本当に大丈夫なのだろうか。魔物の侵略よりよほど重大な危機に瀕しているような気がするのだが。
「一刻も早く会わせたいものじゃが…その服では少し簡素すぎるかの」
「まぁＴシャツとジーパンですからね」
「今日はお疲れじゃろうし、接見はまた日を改めてでよろしいかの」
「ええまぁ俺としては構いませんが。それより聞いてもいいですか？」
「なんなりと」
レンは真面目な顔で告げた。
「イマイチ状況が把握しきれていないんですが、俺はもしかして勇者として異世界に召喚されちゃってたんだったりするんでしょうか」
「いかにも」
「それはやっぱり魔物退治だとか魔王討伐だとかそんなかんじの理由で？」
「いかにも」
「やっぱり結構危険だったりして？」
「言わずもがなじゃな」
「勇者やめたきゃやめてもいいぞ。ちゃんと俺が送りかえしてやる」
ぼそっと呟く。ラナンが驚いた顔でツバキを見た。
「おま、なんちゅうことを…っ」
「うーん。なるほどね。途中棄権できるあたりＲＰＧの主人公よりは良い待遇受けてるって思っていいのかな」
レンはふむふむと頷いた。
「別に異世界の人間のためにお前が命を張ることは無い。いつでも帰らせてやる」

「うーん、でもまぁ、俺どうせあっちにそんな未練ないんだよね」
飄々と言ってのけられた思いもしない言葉に呆気にとられる。
「いきなり召喚されたんだぞ？そんなわけねーだろ。別れを言わなきゃいけない人くらい…」
「特に思いつかないなぁ。俺、家族いないし」
レンの言葉にツバキは目を見張った。この男も両親を亡くしているのか。
大丈夫大丈夫とレンはひらひら手を振った。
「いいよいいよ。困ってんだろ。助けてやるよ。あ、でも痛いのとか苦しいのとかはできるだけ勘弁な」
「もちろんっ有事の際はこやつが身を以てあなたをお守りしますじゃ！」
「勝手に決めんなっ」
「んー女の子に庇われるってかっこわるいからなぁ。それは別にいいや。むしろ俺が君を守るよ」
さらっと言われた言葉に思わず固まる。なんだ今の甘いセリフは。しかもなんだか妙に似合ってしまうから困る。今の言葉だけで恋に落ちる女子だっているかもしれない。いやむしろ多いだろう。そこそこイケメンだし。
言われたのがツバキでなければフラグが立っていたところだ。
「断る」
一刀両断である。
「うぉーつれねー。いやでもツンデレの前フリと思えばなんてことないか」
「つんでれ？」
聞いたことのない言葉だ。
「うん、気にしないでいいよ。とりあえず今日から俺は勇者ってことで。よろしくな魔法使いさん」
よろしくしたくない。色んな意味で。
ツバキはそう心の中で絶叫した。

感慨

「主さま」
「我らが主さま」
「王と勇者を会わせなくてもよいのですか」
「心待ちにしておられたのでは？」
「あとは若い者二人での」という言葉を残し一足先に辞去したラナンの後ろを双子がついていく。
「うん、まぁな。勇者が女であればなおよかったんじゃが、現実はなかなかうまくいかんものよのぉ」
苦笑気味にラナンは呟く。
「女であればタキツスベルスも容易く心を開いたであろうしな。…にしても勇者を女だと信じ込んであわよくば嫁に迎えようとしている王をどうやって立ち直らせるかが問題じゃな…」
古今東西、勇者は男である確率が高い。
そう言い続けてはきたのだが、当代の王は嫌な現実からは全力で目を逸らすタイプだった。
『窮地に陥った自分を助けてくれる素敵な異性との恋☆』にあこがれる気持ちはわからんでもないが、その妄想に取りつかれてしまうのは一国の王としていかがなものか。っていうか女子か。お前は女子か。
「たまりにたまった妄想のはけ口が爆発してタキツスベルスに向かわなければいいんじゃが…そんなことでもしおったらあやつ、舌を噛みかねんぞ」
半ば誘拐のように連れてきた自分を強い非難の目で見ながら、それでも目を逸らしはしなかった。
王をも凌ぐ実力者である自分に今や誰もが平伏する。上目づかいで媚びるような目線を投げかけ、そのくせ決して瞳は合わせない。
燃えるような赤い瞳で真っ直ぐに自分を見てくる。自分がどういう

人間か知りながら。そんな人間に会ったのは久しぶりだった。
「あやつはまっすぐな人間じゃ。それゆえに御するのは簡単と言えば簡単じゃが、一度手綱の使い方を誤ればどうなってしまうかわからん怖さもある。…そういう芯が強いところは母親似じゃな。頑固そうなところは父親か」
それに、と脳内で呟く。個人的にもあの少女をあまり傷つけたくはない。
こんな連れ去り方をしておいて信じてはもらえないかもしれない。だから決して本人には伝えない。
少女の両親がラナンは好きだった。陰謀渦巻く宮中で、彼らのいる場所だけが清浄だった。
王宮を去る時引き留めることはできなかった。
これ以上いたら彼らまで汚れてしまうのではないかと恐れた。注意深く隠していたはずのラナンとの親交も漏れつつあったし、このままでは自分の政力争いにまきこまれて命を落とすかもしれない。そんな思いも後押しして、ラナンはむしろ率先して逃がしてやった。
世を去ったと聞いたときは深い悲しみに襲われた。こんなに早く逝ってしまうのなら自分の傍に一生置いておけばよかったと後悔した。それは為政者ゆえの身勝手さということもできるだろう。自分の傍にいれば守ってやれたかもしれないという気持ちも少なからずあった。
ヤブラン、アルメリア。
君たちは幸せだったかい？
永遠に答えられることのない問いの答えはツバキを見ていればいずれわかるだろうか。
ラナンはため息とともに感傷を振り払った。
「…タキツスベルスの部屋は容易できたか」
「はい」
「ラナンキュラス様がおっしゃったように」
「思い出がありそうな品はすべて持ち出してあります」

「思い出がなさそうな品も他の部屋に隠してあります」
燃やしたのは本当に家だけだ。家具も小物もすべて持ち出してある。思い出を奪われた人間は何をしでかすかわからないから。特に情の厚い人間は。
もっともその家が一番思い出の象徴だと言われてしまえばどうしようもない。帰る場所を無くすために家だけは処分しなければならなかった。
「そうか。ならば後であやつを迎えに行ってやれ。会話が尽きたらどうすればいいか困るだろうからな」
王宮は広い。迷子にさせるわけにはいかない。
なにせツバキはとっても目立つのだ。「私、めっちゃ強くてバカみたいに多い魔力持ってます」と公言しながら歩いているようなものだ。しかも年頃の相当な美人と来ている。男ばかりの王宮ではそれはもう目立ちまくりだろう。そうなっては色々と困るのだ。
「…魔法を使ったことがないとか言っておったな…」
泣き出しそうな声。きっと偽りなくそうなのだろう。
才能がないわけがない。あの二人の子で、あの外見なのだから。おそらく本当に力の出し方がわからないだけなのだ。
「とっとと魔法の使い方を叩きこんで姿変えの術くらい覚えさせたほうがよさそうじゃなぁ。ミモザ、教えてやってくれぬか」
「かしこまりました主さま」
「アカシアは勇者様にこの世界のことを教えておやり」
「かしこまりました主さま」
双子の声が順番にこだまする。
ラナンは満足げに目を細めた。
「どちらも一筋縄ではいかなさそうじゃが…苦労を掛けるな。頼んだぞ二人とも」
双子の顔がぱぁっと紅潮する。
「「かしこまりました主さま」」
二つの声が綺麗に揃った。

ラナンの口元に笑みが零れる。さぁこの国はこれからどうなっていくのだろう。策は練った。それでもうまくいくかわからない博打に出るのは久々だ。
「とりあえず部屋を見たときのあやつの反応が楽しみじゃのう。後で報告よろしく頼むぞ」
きっと驚いて、喜んで、喜んだことがなんだか腹立たしくなって、その場にいない自分に向かって悪態をつきはじめるのだろう。
直接見られないことが本当に残念だった。
「さて、気は進まんがとりあえずわしは王のことを片付けるとしようかの。二人は勇者殿とタキツスベルスのところへ行ってくれぬか。もう二人とも休んだほうがよかろうて」
双子は同時に頷くと踵を返し、部屋に戻っていった。
ラナンは口調とは逆に楽しげな様子で暗く長い廊下を歩いて行った。

驚愕

「あとは若い二人での」と見合い婆、いやジジイか、とにかくそんなことを言ってラナンが出て行ったあと、部屋には沈黙が落ちた。あまりの気まずさにラナンがいなくなったのを少し残念に思う自分がものすごく嫌だった。

いっそ部屋を出てしまおうかとも考えたが、出たところで何処に行けばいいのかわからない。来るときは眠らされていたから外に出る道もわからない。窓を破ろうかとも思ったが窓の外を見てやめた。五階から飛び降りる勇気は残念ながらない。

「何か面白いもの見える？」

気づくとレンが後ろに立っていた。感心したように呟く。

「ふぅん。ほんとに異世界なんだな。街並みが全然違うや」

「お前がいたところはどんな感じなんだ？」

口を開いたのは単純に興味があったからだ。

「んー…そもそも建物が石でできてないからな」

「じゃあ木でできてんのか？」

「そういう家もあるけど。大体鉄筋コンクリートだな」

「てっきん…？」

てっきんとはなんだろう。しばし考える。

「ああ、鉄筋ってのはね、鉄で骨組みを作ってるってことだよ」

「お前の世界はえらい贅沢なんだな！」

鉄は金属の中では比較的安価だが、家を建てると言ったら相当なものになる。

「骨組みは鉄として、他の部分はなんなんだ？」

「コンクリートだよ。っていってもわかんないか。まぁ、そういう名前の物質があるんだなくらいでいい。コンクリートってなんだと聞かれてもうまく答えらんないし」

聞こうと思ったことを口を開く前に却下されてしまった。

「あ、でも動物の姿はあんま変わらないんだな」
「そうなのか？」
「うん。…ペガサスとかユニコーンとかいないの？異世界って言ったらまず期待したいとこなんだけど」
「そんなもんいねーよ。此処はファンタジーの世界じゃねぇ。現実なんだぞ」
「いや、魔法が使えるってだけで俺にとっちゃ充分ファンタジーなんだけど」
何故か申し訳なさそうにレンが呟いた。
「なんだ。お前の世界に魔法はねぇのか」
「ないよ」
「ふん。随分不便なんだな」
「まぁでも便利なこともたくさんあるしね」
「たとえば？」
「電話っていう機械があってね。離れている人とも会話ができる」
「そんなん通話魔法で一発だろ。通信屋に頼めばいい」
「…それがなんなのかイマイチ俺にはよくわかんないけど。電話ってのは持ち運びもできるからさ。いつでもどこでも使えるんだよ」
「いつでもどこでも使う必要がどこにあんだよ。必要なときだけ使えばいいだろうが」
「…あとは部屋を暑いときは涼しく、寒いときは温かくしたりとか…」
「冷却魔法と温熱魔法ということだろう要するに」
「うん、ごめん。なんだか俺が間違ってた気がする」
そういやこの世界に無いものがなんなのかもまだわかんないもんなぁ、とレンがぼやいた。まぁそれはそうなんだろう。
「とりあえず俺は不便だとはそんなに思ってませんでしたよってことで」
「ふん…なぁ、お前もしかして魔法使えないのか？」
「言っただろ、俺の世界に魔法なんてないよって。だから当然使い

方なんて知らない」
「勇者のくせにか」
「いや俺向こうの世界じゃただの一般ぴーぽーですから。超地味な一般人」
「その目と髪の色で目立たねぇわけがないだろ」
「あーうん、残念だけど俺の国大体みんな生まれたときは目と髪の色黒なんだよね」
「生まれたとき…？じゃあ成長すると変わるのか！」
どうやれば変わるんだと身を乗り出すツバキに苦笑する。
「そういうわけじゃないよ。染めたり色抜いたりする奴がいるってだけ」
「髪なんざ染めても意味はねぇだろ」
「まぁ俺も黒いほうが好きだけどね」
「湯あみしたら色落ちちゃうだろ。それともなんだ、毎日湯あみの後にまた染め直してんのか」
なんてめんどくさい世界なのだろう。
レンは「違う違う」と手を振った。
「向こうじゃ一度染めたら水浴びたくらいじゃ落ちないんだよー」
「なんだと！？じゃあやっぱり染めるのは数日くらいかかるのか？」
「…いや、二時間もあれば充分だと思うけど…」
レンの言葉に三度驚く。
「そ、それでどんくらいもつんだ！？」
「えーっと、まぁ新しく生えてくる髪は前とおんなじ黒だけど。一度染めたとこはそのまんまだよー。だから三か月くらいは大丈夫なんじゃないかな。よくわかんないけど」
姿変えの術ですら三日が限度だ。
「…お前の世界にも優れているとこはあんだな…」
「うーん、まさかそこで驚かれるとは思わんかったが」
まぁいいかとレンがぼやく。
「あー、早くこっちの生活にも慣れていかなきゃなぁ。大丈夫かな

ー。俺、パスポートすら持ってないんだけどな」
「ぱすぽーと？」
「んー、国の境界線を越えるための通行証みたいなもんだよ」
「なるほど。つまりお前、自分の国から出たこともねーのか」
まぁツバキとてないのだけれど。
「そうだね…一度くらい出てもよかったかもな。まぁ過ぎたことを言ってもしょうがない」
レンは首を竦めた。
「とりあえず此処でやってくしかないわなぁ」
レンの態度に疑問を覚える。
人はいきなり違う世界に飛ばされて此処まであっさりと受け止めることができるものだろうか。
そういえば彼は『世界に未練がない』とはっきり言った。
「おまえ、なんでそんなに落ち着いてやがるんだよ」
「ん？いや、これでも結構動揺してるよ？」
とてもそうは見えないが。
「ああでもそうだな…世界を終わらせたいとは思っていたから。ちょうどよかったのかもな」
「死にたかったのか」
レンは答える代わりに微笑みを浮かべた。
その表情が何よりも雄弁に物語っていた。
なぜかは聞かない。きっとまだ出会って間もない自分が触れてはいけない箇所だろう。
「死にたいのなら殺してやる」
『勇者』がどういう存在なのかツバキは知らない。それでもその道が過酷であろうことは想像がつく。
死んだほうがマシだと思うことがきっとあるだろうとも。
それならば今、望むとおりに殺してやりたい。
望みもしなかっただろう世界に呼んでしまった者の義務として。
レンは微笑んだ。

「ありがとう。でもいいよ。今は死ぬ気はないんだ」
この世界に来たから、と呟くように言った。
「ここはそんなにいい世界か？」
盗みはある。人をだますやつも殺すやつもいる。魔物に食い殺される人間とて後を絶たない。何処にも安心して暮らせる場所などない。王宮とて陰謀が渦巻いている。
「そういうわけじゃない。…っていうのは失礼になるのかな。まだよく知らないのにさ」
「別に構わん。その通りだと思うから」
いつまでも幸せに暮らしましたなんて御伽噺は多分何処の世界にも存在して、それは人が人である限り叶わぬ夢なのだろう。
御伽噺であるしかない話なのだろう。
「俺が死ぬまいと思ったのはツバキに会えたからだよ」
予想外の答えに意表をつかれる。
「は？どういう意味だよ」
「秘密」
レンはそう言ってツバキの頭をわしゃわしゃ撫でた。
一瞬にして殴り倒す。
「何しやがる」
「うん…こうなる気はしてたけど…反省はしている。だが後悔はしていない」
「しろよ。学習能力のねぇ野郎だな」
「俺わりかし変態なんだ。今の状況はご褒美と言っても過言ではない」
「わりかしどころか筋金入りの変態じゃねぇか」
コンコンとノックの音がした。
「「失礼いたします」」
例の双子が部屋に入ってきた。
「タキツスベルス様にお部屋をご案内するように仰せつかりました。ミモザと申します」

「レン様に世界の説明をするよう仰せつかりました。アカシアと申します」
「「以後お見知り置きを。末永くよろしくお願いいたします」」
二人が口を開いているのは見えるからきっと二人とも声を出しているのだろうが、タイミング、声が同じすぎて一つの声にしか聞こえない。
「それではタキツスベルス様。こちらへ」
「レン様。まだこの世界に来て数刻。ベッドにお戻りくださいませ」
促されるまま挨拶もそこそこにツバキは部屋を出て行った。

奴隷

案内された部屋は日当たりも良く、レンの部屋ともそんなに離れていなかった。
だが何より驚いたのはその部屋の家具が全て自分の家にあったものだということだった。
「これは…」
「ラナンキュラス様の命令で私たちが運びました」
ふらふらとテーブルに触れる。それは間違いなく慣れ親しんだものだった。
「よかった…」
じんわりと広がる喜びをかみしめる。同時に深い悲しみも去来した。
「そうか…本当にもうあの家はないんだな…」
急だったから怒りを感じる暇もなかった。
「とりあえず礼を言っといたほうがいいだろうな。ありがとう」
「いいえ。命令でしたので」
ツバキが言うのもアレだが、もうちょっと言い方ってもんがあると思う。
「御礼ならばラナンキュラス様に」
「誰があのじじいに礼なんざ言うか」と反射的に返していた。
「拉致られて家燃やされて御礼なんざ言えるわけねーだろ」
怒りが湧きあがる。あのジジイ。メイドさえいなければとうにぼこぼこにしている。不敬罪で処刑されようとしったことか。
「命令されていなければこれはここにはないのです」
「何の命令もなければ家も燃やされてないんだけどな？」
スルー。くそ。このメイドも腹立つ。
「あのジジイにしてこのメイドありかよ。くそっムカつくタヌキどもだな」
メイドがぴくっと反応した。

「取り消せ」
「は？」
「私のことは良い。でも主様を悪く言うな」
言葉と空気の刃を喉元に再度感じたのはほぼ同時だった。
「取り消せ」
「…っ嫌だ！」
自分とてプライドというものはある。
ラナンを許すわけにはいかない。絶対に。言葉だけであっても。
「大体てめー、理不尽なんだよ！俺は別に誰かに迷惑かけてたわけじゃねぇ！ただひっそりと暮らしていきたかったんだ！それをこんなとこに引っ張ってきて家燃やして？挙句に逃げるのは許さないだぁ悪口も言うなだと？俺はそんなお人よしじゃねぇよ！」
ふ、と刃が離れた。
冷や汗がどっと出てその場にしゃがみこむ。
「…確かに、そうなのかもしれない」
ミモザがぽつりと言った。
「それでも私の前では言わないでほしい。私たちにとってあの方は全てなのだから」
哀しげな姿に罪悪感が胸を刺す。
いや、と頭を振る。罪悪感など感じる必要はない。自分は悪いことなどしていないのだから。
「あのじじいが全てだと？あんたら此処にいるってことは良いとこのお嬢様なんだろ？」
薄く笑うとミモザは下ろしていた髪をすっと持ち上げた。
ツバキは息を呑んだ。
「…あっ…」
尖った耳。人とは違う種族の証。
「おまえら、エルフ族か…？」
沈黙が肯定の証だった。
エルフ族はこの世界においてはもっとも高級な奴隷である。滅多に

市場に出回らず、一人一人が高値で取引される。彼らは高い魔力を持ち、身体能力も優れていると聞く。
「主さまが哀れに思って買ってくださった。アカシアと離れずに済んだのも主さまのおかげだ」
耳についているカフスの石の色は紫。所有者の身分を表す。つければ一生外れない。石は所有者が変われば色を変える。所有者から所有者の決めた距離以上離れると石は割れ、毒が注入されて奴隷は死に至る。
「主さまは悪い方ではない。ただ容赦しないだけなのだ」
「いやそれ充分悪い奴だと思うんだが」
「主さまはいつも平和を祈っている。みんなの幸せを祈っている。そのために障害を排除することを躊躇しないだけだ」
「ああうん、お前がフォローが下手なのはよくわかったよ無理するな」
「ちょっとやりすぎちゃうことが多いかもしれないけどでも主さまは本当にいろんな人のことを考えておられるのだ。いつだって悪気はこれっぽっちもないのだ」
「もうお前、主さまを庇わないほうがいいと思うぞ！？」
悪気がないほうがタチが悪いと思うのだが。
ミモザがはっと我に返ったように口を押える。
「私はしゃべるのがあまり上手でない」
しゅんとして言うのが可愛い。
「アカシアは上手なのだけれど…」
双子と言えど得手不得手はあるようだ。
「でも気持ちは一緒。主さまの悪口を言わないで」
じっと見つめてくる。悲しげな顔。必死な者の瞳だ。本当に主を敬愛しているのだろう。それにしても瞳の色は主と同じ紫だが、随分印象が違うものだ。ラナンの瞳は深い紫でミモザとアカシアの瞳は薄紫だからなのかもしれない。
女の子にこんな顔をいつまでもさせておけるほど鬼畜ではない。

「あー…わかったよ。気を付ける。いないときは言ってもいい？」
ミモザはちょっと嫌そうな顔をしたがしぶしぶ頷いた。
「とりあえず、ちょっと寝かせて。なんかあったら起こしていいけど」
「わかりました、タキツスベルスさま。」
「あ、あとその言い方やめて。敬語苦手なんだ」
「かしこ…わかった。では夕食時に迎えに来る」
「うん、頼んだ」
一礼をしてミモザは部屋から出て行った。
慣れ親しんだベッドに体を投げ出して目を閉じる。なんだか今日はとても疲れた。
そういえば、と思い出す。
どうして勇者はツバキの名前を知っていたのだろう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5025x/

勇者なんていらない

2011年10月20日02時10分発行